

一九四五年フランス国民の帝国意識

——新聞報道からみるシリア騒擾とベトナム八月革命——

杉 本 淑 彦

【要約】 一九四五年当時のフランス国民には、同年春にシリアで騒擾が、そしてベトナムでは八月革命がそれぞれ勃発したゆえに、成就されたドイツからの解放に加えて、帝国意識からも自らを解放する展望が開かれていた。しかし、レヴァントでみられた原住民の反仏感情噴出も、それに対するフランス軍の非人道的武力弾圧も、そして約八〇年間のフランス支配に対する原住民側からの有罪宣告に他ならないベトナム八月革命も、フランス国民に植民地支配の罪過を自覚させるには至らなかった。何れの場合も、「文明化の使命」論や、その亜種であるフランス無罪論・被害者論、「植民地の民族主義者」反民主主義者「論等を内容とするド・ゴールの言説と新聞の報道が、そのような自覚の形成を阻害し、帝国意識からの解放を失わしめた大きな一因だった。

史林 七三卷六号 一九九〇年十一月

はじめに

第二次世界大戦後から一九五〇年代後半までの、ほぼ第四共和制に相当する時期のフランス史は、植民地紛争の歴史として描くことができる。対独戦終結直後の一九四五年五月にアルジェリアとレヴァントで、民族独立を要求する原住民と武力衝突。対日戦が終了するや今度はインドシナでベトナムと対峙し、これは一九四六年十二月に（第一次）インドシナ戦争へとエスカレーション。翌一九四七年春にはマダガスカルで蜂起と弾圧。インドシナ戦争は一九五四年一応停戦となる

が、それと前後してアルジェリア戦争の勃発、等々。

フランス植民地主義の歴史の中でも、大戦後から一九五〇年代後半までのこの時期ほど、植民地・従属地域の民族独立運動が頻発し、またその武力弾圧が非人道的であった時期は他にない。そしてこれら弾圧を下から支えていたものこそ、フランス国民、とりわけ保守層の「帝国意識」であったことは多言を要しないだろう。しかし、逆説的だが、民族独立運動、つまり原住民の反仏感情の噴出、および文明とはかけ離れた非人道的弾圧には、帝国意識の中心的イデオロギーとしてフランス国民に植民地支配を正当視させてきた「文明化の使命」論——大革命を産んだ自由で平等で民主的な文明国フランスは、遅れた野蛮な植民地原住民にそれら文明の諸価値を教える使命があり、一方植民地原住民はそのようなフランスの支配下にあつて文明化を享受しフランスに感謝する——を根底から突き崩す作用力があるゆえに、この時期はまた、前世紀に萌芽し両大戦間期に根付いた帝国意識の呪縛からフランス国民が自らを解き放つ展望が開かれていたはずの時期でもあつた。それに加えこの時期はまた、フランス人の自由と民主主義（ドイツからの民族的解放）を目指す抗独レジスタンスを経た時期であつただけに、フランス国民には、フランス帝国内原住民の自由と民主主義（フランスからの民族的解放）を目指す反仏闘争を理解し、帝国意識から解放される展望がなお一層広く開かれていたはずだつた。では、なぜ実際にはこの展望は閉ざされてしまつたのだろうか。

本稿はこのような問題意識に基づき、ド・ゴールや社会党・共産党等の政治家・政党の植民地政策・思想の分析を旨としてきたこの時期の従来の研究とは異なり、ド・ゴール首班臨時政府時代（一九四四年八月～一九四六年一月）に勃発した植民地紛争のうち代表的なものを二例取り上げ、国民レベルの帝国意識の温存・強化のあり様を明らかにしようとするものである。^②対象時期をほぼ一九四五年に限定する理由は、第一に、その時代は抗独レジスタンスの経験がまだ鮮烈であり、それだけ一層、帝国意識を払拭しえる好機が大きかつたと考えられること。第二に、第四共和制序奏のこの時期に温存・強化された意識がその後の第四共和制全期の意識を規定しただろうと推察できること。そして最後に、とりわけ第五共和

表1 政府許可公認発行部数

	1945年 1月	1945年 12月
<i>Le Figaro</i> (1944年8月23日再刊)	231,000	445,000
<i>L'Aube</i> (1944年8月23日創刊)	148,000	143,000
<i>Le Monde</i> (1944年12月19日創刊)	150,000	170,000
<i>L'Epoque</i> (1945年5月3日再刊)	不明	不明

Histoire générale de la presse française, tome 4, 1975, p. 300 より作成。

制になってから非植民地主義者として評価されてきたド・ゴールの実像の再検討をおこな
いたいがためである。

また、対象とする「国民」も、紙幅の都合と、ド・ゴール臨時政府の植民地政策を最も
強く支持していたという事情に鑑み、ド・ゴール支持のいわゆる保守層に限定する。

そして方法としては、保守層が購読していたと考えられる新聞の報道を検討することで、
帝国意識の温存・強化のプロセスを考察する。取り扱う新聞は、(1) 一般紙の中では当時
最大部数の *Le Figaro*、(2) ド・ゴール派政党『人民共和運動MRP』系新聞 *L'Aube*
(3) 一般夕刊紙の中では最大部数であり、戦前の保守高級紙 *Le Temps* の後継紙 *Le Monde*
最後に、(4) 有力一般紙の中で最保守の *L'Epoque* である(表1参照)。また、帝国意識の実
体を直接抽出するために、大戦後のこの時期にフランスでも本格的に開始された世論調査
を用いる。調査機関は Institut Français d'Opinion Publique (以下 I. F. O. P. と略記) を
サンプル数は平均二五〇〇人である。

なお、以下の引用文において丸括弧は筆者の補筆であり、また、新聞日付に記す*と*
の記号はそれぞれ一九四四年と一九四六年を表し、無記号は一九四五年を意味する。

- ① 「帝国意識」の定義については、木畑洋一『支配の代償——英帝国
の崩壊と「帝国意識」——一九八七年、東京大学出版会、二七五〜七六
頁参照。
- ② ド・ゴールや社会党、共産党の植民地政策、思想に関する主な文献
は、*De Gaulle et la nation face aux problèmes de défense 1945-*
1946, 1983; De Gaulle et l'Indochine 1940-1946, 1982; A. Ruscio,

- Les communistes français et la guerre d'Indochine 1944-1954, 1985;*
G. Madjarian, La question coloniale et la politique du P. C. F.
1944-1954, 1977; B. Marshall, The French Colonial Myth and
Constitution-making in the 4th Republic, 1973; S. Bernstein,
"French Power as seen by the Political Parties after World
War II", in Power in Europe?, 1986; 小論「政権参加期へのトク

共産党の植民地構想』『史林』、七一巻五号、一九八八年。

なお「国民の帝国意識を取り扱った文獻として」Ch. R. Ageron
の以下の二件があげられる——“La Survivance d'un mythe: La puis-
sance par l'Empire colonial 1944-1947”, in *La puissance fran-*

çaise en question 1, 1945-1949, 1988; “L'opinion publique face
aux problèmes de l'Union française”, in *Les chemins de la dé-
colonisation de l'empire français 1930-1950, 1986*.

一節 シリア騒擾

一九四一年七月以降ヴィシー派軍隊に代わってド・ゴール派軍隊（自由フランス軍）とイギリス軍が駐屯するようになったフランス委任統治領シリア・レバノンでは、「フランス人の歴史的在留権と權益とが保護されるような独立」を主張し文化・経済・軍事面でのフランス權益（少数派のマロン派キリスト教徒に対する保護干渉権、教育・行政におけるフランス語使用、フランス資本の経済活動保証、特殊部隊という名の原住民兵部隊指揮権、海空軍基地等）を認める協定を独立に先だって締結するよう求めるド・ゴール首班のフランス共和国臨時政府（一九四四年六月結成。前身はフランス国民解放委員会）と、一方、フランスのみの特殊權益を否定し完全独立を求めるシリア・レバノン両政府との間で、緊張した独立交渉が大戦中から続いていた。そして交渉が暗礁に乗り上げ中断していた一九四五年春、ついに武力衝突の事態をむかえる。

まず四月下旬ド・ゴールが交替・増援部隊をレヴァントに緊急派遣すると決定。これを知ったアメリカ政府は、「かの地のデリケートな政治状況を考えると、どんな教にせよフランス軍部隊が今レヴァントに到来すれば、それは現地住民の目に挑発的・脅迫的行為として映るに違いなく」（二六日付國務長官代理グロウ Joseph C. Grew の駐仏大使キャファリー Jefferson Caffery 宛電報）^②、「国内に騒擾を引き起こすかもしれない」（三〇日付同電報）^③と懸念し、そして五月四日キャファリーがこの懸念をド・ゴールに伝えた。またチャーチルも同日ド・ゴールにメッセージを送り、部隊派遣がシリア・レバノン側に「不安や一時的興奮を挑発」し、彼らはフランスが「武力によって協定を結ぼうと準備しているのだと、かならずや推測して、「まさに開かれようとしている交渉の雰囲気にとって有害」となるだろうと警告、再考を促した。

しかしド・ゴールは部隊派遣を強行した。五月六日軍艦モンカルム (Montcalm) 号で第一陣セネガル人兵約九百名ベイルート上陸。はたして米英政府の懸念どおり八日、シリア政府指揮下の憲兵隊および民衆がフランス軍駐屯地を襲い、それにフランス軍が反撃する形でシリア各地で大規模武力衝突発生。九日には二年間駐屯していたセネガル人兵約五百名がモンカルム号に乗船・撤収するが、武力衝突がおさまりつつあった十七日夜半、第二陣フランス人兵約六百名を乗せた軍艦ジャンヌダルク号がベイルート入港。翌十八日部隊上陸。同日、レヴァント方面フランス全権総代表ベーネ (Paul-Etienne Beyne) 將軍は、(1)「文化・経済・戦略的利権」の確保を要求し、(2)「この三点で合意に達すればフランス政府は、ド・ゴールの承認国による指揮の全面行使を許さない状況が続く限りフランス軍最高司令部の指揮下においておくという条件で、特殊部隊の両国への委譲に同意する」、という内容の提要を現地政府に伝達し交渉再開を提案。^⑤しかし両政府は拒否。この時点のフランス側の意図をアメリカ國務省近東・アフリカ局長ヘンダーソン (Loy W. Henderson) は次のように考えていた。

「《戦略基地》を含む特別の地位をフランスに与えシリアとレバノンの主権を侵害するような要求をレヴァントのフランス外交代表団が突きつけた同じ日に、フランス側は増援部隊を上陸させた。国連加盟の二国から政治的・文化的・軍事的性質の譲歩を引き出すために、フランスが武力ないしその脅しを今使っていることは明白である。満州で日本が、そしてエチオピアでイタリアが使ったのと同じ策略を、フランスは公然と遂行しつつある」^⑦(五月二三日付グルー宛電書)

そしてこのフランス側の挑発的姿勢の有効性をシリア・レバノン両政府自身が懸念しなければならないほどに、民衆の反仏感情は激昂していた。シリア・レバノン駐在アメリカ総領事ワドワース (George Wadsworth) はこの点を次のように國務長官宛報告している。

「フランスの提要内容が住民の知るところとなれば、シリア・レバノン両政府が状況を掌握し続けていられるか非常に疑わしい。民衆の抗議デモが避けられないと思われる。両政府同様私も、フランスの挑発分子がそのようなデモを操り衝突を引き起こして、『公秩序維持のために』軍事介入するという口実をベーネに与えられるようにするのはないか、と恐れている」^⑧(五月十八日付)

「五月二〇日のシリア外相との会談で」次のように打ち明けられた。『反仏運動が国中いたるところで險悪化しているため、シリア（政府）はこの混乱の原因である人々を攻撃から守らなければならないというパラドックスな立場におかれている。フランスは戦争に負けたがドイツがフランスでしたような条件をシリアに指令しようとしている、ということを知っている。フランス軍部隊が秩序維持のためだと称して介入すれば火に油を注ぐようなものである。民衆の怒りは一九二五年の叛乱らしいの極みに達している』（五月二一日付）

「五月二九日レバノン外相ファラオン（Henri Pharaon）と会談。おおむね次のように打ち明けられた。『われわれ（レバノン政府）はますます難しい立場におかれている。レバノンは平穩だとしても、それは、ゼネストと反仏デモでシリア人への連帯を示そうとする過激派及び増大しつつある民衆の圧力を抑えて、われわれが平穩状況を保ってきたからなのです。……（中略）……シリア政府自身が急速に状況の統制力を失いつつあり、シリア政府が今日の議会に定足数の議員を連れてこれるかどうかも疑わしい。それほどにフランスへの憎悪は深いのです。シリアの民衆と議員は、新たな言葉ではなく行動を望んでいる』」（五月二九日付）

ワドワースがファラオンと会ったこの二九日の夜、彼らの懸念どおり武力衝突再発。ワドワースは國務長官宛次のように緊急打電した。

「ポーター（ダマスカス駐在アメリカ副領事。William J. Porter）が午後七時三〇分、（ダマスカスの）オリエントパレスホテルと市場の間にあるフランス軍兵舎から重機銃が撃たれていると報告するためにホテルから私へ電話をしてきた。通話中に応戦の銃撃がホテル屋上を含む近くの様々な地点からあり、ついで機銃の連発（受話器を通じて聞こえました）が隣接のフランス軍酒保からおこなわれ、そして回線不通」

以後、とりわけダマスカスでフランス軍の砲爆撃が激化。三〇日夜半、レヴァント駐在イギリス公使ション（Terence Shone）は次のようにイギリス外相イーデン宛打電した。

「フランス側はダマスカスに恐怖政治を打ち建てた。無差別砲爆撃に加えて、フランス軍は黒人兵も白人兵も狂人のように街頭を機銃掃射してゐる」

また『ザ・ニューヨーク・タイムズ』は次のように報じている。

「銃撃は昨夜七時頃始まり、激しさに程度の差こそあれ一晩中続いたようである。シリア議会の建物の近くにフランス軍装甲車数台が現れたのが騒擾の始まりだと言われている。また一説によると、フランス軍部隊（特殊部隊）からの脱走を試みたシリア人兵士一人がダマスカス市民の群の中に逃避場所を求めようとして騒擾が始まった。群衆は脱走兵を保護しようとしてフランス人兵士から銃撃され、そして応戦の発砲があった。その後群衆の大半は追い散らされたが、火器を所持するごく少数の者たちが発砲し続けた。シリア政府機関の建物の中にいた（シリア）首相は、政府の建物が攻撃されない限りは発砲を控えるようにと護衛兵に命令した。その後建物は、フランス側の砲火で損傷を受けた後、フランス軍歩兵部隊によって占拠された」（ロンドン特派員電。五・三二）

「ダマスカスはフランスの大砲で砲撃され、フランスの飛行機で爆撃され、少なくとも二つの地区で火災が発生した。死傷者はシリアの首都だけで数百にのぼった」（ロンドン発UP電。六・一）

「シリアの首都は依然緊張下にあるが、少なくとも一時的に今夜は静かである。フランス人は水曜日（三〇日）の夜と今日（三一日）の午後四時までずっと絶え間なく町の中心部に迫撃砲の雨を降らせ、そして破壊されたそこから今でも煙が立ち昇っている。死傷者の最新の数字が公衆衛生局長カドゥリ（Annet Kadry）博士によって示されたが、彼によると、停戦中に救急車が拾い上げた死者は四百、負傷者は五百人。まだ数百人あるいは数千人の死傷者が旧市内の狭い街路上に依然として横たわっていると考えられる」（ダマスカス発AP電。六・一）

そして三一日。イギリスは、自国の同盟国フランスに対するアラブ世界の反感が反英感情に発展することを懸念すると主張して軍事介入。翌日、英仏衝突の危機を前にフランス軍が駐屯地に撤退、フランス軍の激しい砲爆撃はようやく止んだ。

さてこの五月騒擾はフランス国民に、自国のレヴァント支配の罪過を自覚することで帝国意識から解放される好機を提

供していた。なぜなら、(1) 現地一般民衆の反仏感情噴出と、(2) 「文明」とはかけ離れたフランス軍の挑発と殺戮行為は、フランス国民に植民地支配を正当視させてきた「文明化の使命」——自由で平等で民主的な文明国フランスの支配下にある植民地原住民は文明化を享受しフランスに感謝する——というイデオロギーを根底から揺さぶる性質のものである。

しかしフランス国民がこの好機をとらえるには大きな障害があった。四新聞が報じた騒擾の顛末は現実のそれと大きく乖離していたからである。ド・ゴールの弁明等を掲載した四新聞を通じて、フランス国民は次のような六つの論点に執拗にさらされた。

第一。現地一般民衆自体はフランスに反旗をひるがえす気持ちはないのに、シリア・レバノン両政府と、そして何よりもイギリス政府が反仏的であり、このことが騒擾の誘因だとする論点。代表例を引用しよう。

「多くの紛争は私たちにとっては、上はイギリス政府という段階から、下は、かの地で私たちに敵意を含んだ、あるいはすくなくとも批判的な態度をとっていた多数の英国官吏にいたるまでの行動によってとられる態度から生じているのであります。……(中略)……さまざまな武装集団——彼らは、シリア政府に従属し、多年にわたり私たちがその点について警告を発してきたにもかかわらず、遺憾ながら、イギリス当局から手渡された武器を携行する地方警察・憲兵隊にしばしば援助されています^⑬」が各所においてフランス軍守備隊や個々のフランス人に攻撃をかけたのです」(六月二日ド・ゴール記者会見。L'Aube, 6・3・4; Le Monde, 6・5)

「シリアで民衆叛乱というようなのはまったくなかった。五月二十九日の暴徒は民族主義の扇動家でさえなく、大部分はシリア憲兵隊であった。彼らは、大急ぎで採用された泥棒連中で補強され、そして書くのも恥ずかしいことだが、ロレンス大佐の無名の好ライバル達からイギリスの武器を与えられている」(Maurice Schumann 論説。L'Aube, 6・8)

「われわれに銃火を浴びせたのは憲兵だけだった。というのも、シリア人住民は決してわれわれに敵対しなかったのである」(六

月七日南部シリア方面軍司令官オリヴァーロジエ Oliva-Roget の情報省での記者会見。L'Époque, 6・8)

「配下の者が騒乱の原因であることをイギリスは否定している。しかし、古い話だが、既に(第三回十字軍で)フィリップ二世とリチャード獅子心王はあまり仲がよろしくなかったのであります。「笑い。」ドイツの宣伝は、イギリスがレヴァントからわれわれを放逐しようとしており、また、ド・ゴール將軍はイギリスの道具である、と主張していた。この二つの命題のうちの一つは今のところ事実をもってはつきりと否定されてはおりませんが、近い将来否定されんことを願っております。「拍手。」(六月十五日MRP所属外相ビドー Georges Bidault の諮問議会報告。L'Arbe, L'Époque, 6・16; Le Monde, 6・17-18)

「破滅的なことに、利己心に駆られ、かつ手段を有す一外国勢力がダマスカス・ベイルート両政府とわが国との関係に絶え間なく容喙しこの関係を混乱させてきました。……(中略)……フランス代表の冷静な対応と住民大多数の分別のおかげで、五月八日までは秩序は乱れておりませんでした」(六月十九日ド・ゴール諮問議会演説。Le Figaro, L'Arbe, L'Époque, 6・20; Le Monde, 6・21)

また新聞時事漫画(A)も、レヴァントからフランスを放逐せんとするイギリスの野心が騒擾の誘因だという解釈を国民に注ぎ込むものであった。

第二の論点は騒擾の契機に関してで、フランス軍到来は挑発行為ではなく、むしろ逆にシリア・レバノン両政府によって交渉中断と武力攻撃の口実に使われたという論点。これも数例引用しよう。

「シリア・レバノン両政府は、フランス交替部隊のレヴァント到着の機会をとらえ、大都市と各地で人為的騒乱を引き起こしたのである」(Le Figaro, 5・22; Le Monde, 5・23)

「交替のため増援のために来たわけではない部隊の上陸が、実のところ、入念に準備された武装行動の火蓋を切る格好の口実になった」(Le Monde, 6・2)

「好意の証を示すためにフランス政府は、特殊部隊をシリア政府に委譲することを決めておりました。しかしそうなれば、フランス軍司令部が持つ既に小さい軍事力がさらに弱まることになるでしょう。また、疲弊しているフランス軍の交替に平行して取り組

むよう現地フランス代表团が要求しても
 おりました。これが、わが国が非難され
 ている増援部隊派遣のそもその発端な
 のであります。……(中略)……シリア
 ・レバノン両政府はこの数百名の到来を
 口実に、五月十九日、つまりわが国の
 提案を知るより前に、交渉をしないと宣
 言し、そして二〇日重大な紛争がシリ
 アのいくつかの町で勃発したのでありま
 す」(六月十五日ビドー諮問議会報告。
L'Aube, 6・16)

特にビドーの議会報告には故意の言い
 落としと虚偽がある。「好意の証」である

はずのベネ提要是、前述したように実際には、特殊部隊委譲に大きな留保条件を付けていたし、また十九日ではなく十八日にシリア・レバノン両政府に手渡されていたのである。

第三は、攻撃されたのはフランス軍でありダマスカス砲爆撃等の行動は正当防衛であった、という論点。同じく引用してみよう。

「(五月二十九日夕刻)ダマスカスのフランス軍全部署が攻撃された。一晩中激しい戦闘が続いた。フランス軍部隊はシリア憲兵隊に攻撃され、断固とした抵抗で応じた」(ペイルート発AFP電。*L'Aube, L'Epogue, 5・31*)



(A) *L'Aube, 6・23*

「さまざまな武装集団が各所においてフランス軍守備隊や個々のフランス人に攻撃をかけたのです。またフランスの軍事建造物のみならず民間建造物をも攻撃してきました。何人かの死者がございましたし、当然わが軍はかかる状況に接して反撃をおこない、秩序回復にあたらざるをえませんでした。……(中略)……いうまでもなく、攻撃をしかけられたときには、防禦します。……(中略)……われわれはその地に、全自由諸国家の委任統治者としていたのです。われわれの側はそこで攻撃を受けました。彼らは自衛しました。彼らはできるだけ経済的に自衛したのだと思います」(六月二日ド・ゴール記者会見。La Figaro, 6・3-4; La Monde, 6・5)

「わが国の部隊は、幾多の攻撃に辛抱強く耐え、そして損失を被った。そして煽動者連中は、イギリスの介入を避けられないものにしたかったかのような行動にでたのである」(La Figaro, 6・9)

「フランス人の軍人・民間人は憲兵隊分子の混じるデモ隊によって攻撃され、負傷するか殺害されるかしたのであります。このように攻撃されたために、わが国の部隊は自衛したのであります」(六月十五日ビドー諮問議会報告。L'Aube, 6・16)

「わが軍は、正当防衛の態勢におかれつつ反撃し、義務と権利に従って秩序維持にあたらなければならないのであります」(六月十九日ド・ゴール諮問議会演説。Le Figaro, L'Aube, 6・20; Le Monde, 6・21)

そして第四の論点。フランス軍が砲爆撃を停止した六月一日以降、フランス人兵士・民間人に対する攻撃が相次ぎフランス側が一方的な被害者になっているという論点が次のように展開されたのである。

「(六月五日閣議でのビドー報告によると)イギリス軍介入以降、ダマスカスでフランス人、とりわけフランス人女性に対する襲撃が計十二件おこっている」(L'Epoque, 6・9)

「イギリス当局は、シリアとレバノンの憲兵隊に武器を渡したと、六月五日フランス軍当局に通告してきた。機銃装甲車がシリア憲兵隊に二五台、レバノン憲兵隊に八台引き渡されたのである。この事で、さきの事件でシリア憲兵隊が果たした役割が思い起こされる。フランス軍部署を襲ったのは彼らだったのではないか。武器引渡しは六月四日におこなわれた。そしてその日、フランス婦人二名が殺害されたのである」(Le Figaro, 6・8)

「あと数日でフランス人のシリア脱出が終わる。官吏、商人、教員、修道士、修道女、ならびに軍人の妻子は皆レバノンへ退きつつある。シリアのフランス人は男も女も着の身着のまままで飛行機に乗せられレバノンの海岸へ運ばれている」(Le Monde, L'Aube, L'Epoque, 6・13)

「シリアにおけるフランスの物的・精神的損害はまだ判然としない。しかしとにかく、略奪を免れたフランス人の家屋はほとんど一軒もないと言えるだろう」(L'Epoque, 6・13)

「らい病患者の世話をしてきたフランス人修道女たちが、この七三年間彼女らが運営してきた病院から追い出され、彼女ら自身の患者から罵りを受けた。……(中略)……士官六名、下士官五名からなるフランス軍幹部がドゥメールで虐殺された。死体は紐で縛られ身体中に傷があった。彼らは残忍な拷問を受けたのである」(Le Figaro, 6・13)

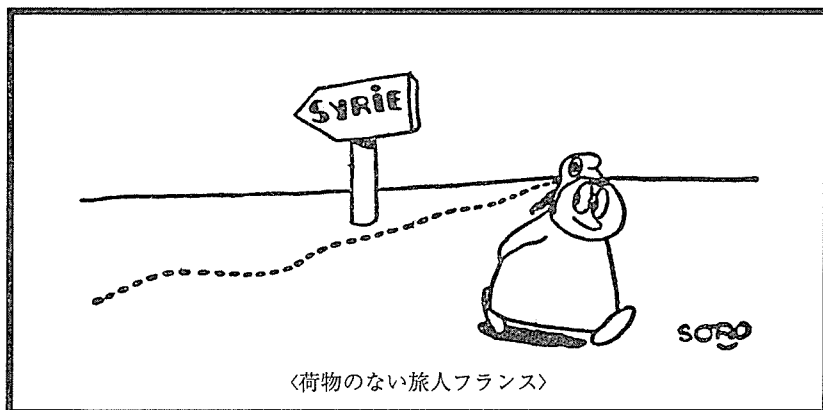
「フランス人士官二名がアレppoとラタキア間にあるイドリブで日曜(十七日)に殺害された。……(中略)……流血事件がアレppoでも発生し、フランス人の婦人一名が殺害され、同じく民間人三名と兵士一名が負傷した」(Le Monde, Le Figaro, L'Aube, 6・19)

「シリア北部の部族が、トルコシリア国境のフランス軍部署複数を襲った。ある地区では、フランス人はトルコ領へ避難しなければならなかった。アレppo近辺では、フランス人が兵舎近くの街道でも襲われ、毎日のように事件が発生している」(Le Monde, 6・24-25)

「先だつての夜、アレppoのフランス代表の庭に手榴弾が投げ込まれた。別の手榴弾が同代表の車に投げられたが、幸いにも代表は車中にいなかった。フランス代表になされるこの種の未遂事件は、ここ数日間でこれが四度目である」(L'Epoque, 6・28)

「昨日ラタキアでおこった流血の暴動の口実は、(フランスの)軍用トラックが少女をはねるといふ月並みな事故であった。事故直後に兵士が短刀で刺し殺され、ついで群衆が司令部を攻囲した」(L'Aube, L'Epoque, 7・7)

「九日アレppoで、フランス人居留民の一団が避難していたマリア会会士の建物で、シリア憲兵隊によって銃と手榴弾による攻撃を受けた」(Le Monde, 7・12)



(B) *L'Aube*, 6・20



(C) *L'Aube*, 6・22

また新聞時事漫画 (B・C) も、フランス国民に被害者意識を植え付けるものであった。

以上四つの論点は、(1) シリア・レバノン両政府と何よりもイギリス政府に騒乱の責任を押し付けることで、一般民衆の反仏感情の實在を覆い隠し、(2) フランス軍到来が交渉拒否の口実に使われたとして、その挑発性には頬かむりし、(3) フランス軍のダマスカス砲爆撃等は正当防衛だったとして、その殺戮を免罪し、(4) フランス軍が砲爆撃を停止した六月一日以降フランス人が攻撃されたことを強調することで、フランスは加害者ではなく百パーセント被害者なのだと言いつのたのである。このように、フランスのレヴァント植民地支配の不当性をフランス国民自身が自覚できないような情報歪曲がなされたうえで、次に第五の論点として、アラブ・イスラム世界の非民主的・ファッショ的・暴力的性格が次のように強調された。

「シリアの騒乱を中心になって組織した人物は、ドリオ党 (ファシズム政党のフランス人民党。党首は Jacques Doriot) の子分格のアラブ人民党議長である」(Le Figaro, 5・30)

「オリエントでナチの影響力が深かったことは確かなことです。その名残があり、例えば五月八日ベルイトでは、鉤十字の旗を持つパルステイナ部隊の行進で混乱が生じました。これは非常に意味深なことであり、私としては、全オリエントでドイツの影響力は生き残っていると考えております」(六月二日ド・ゴール記者会見。L'Aube, L'Epoque, 6・3・4; Le Monde, 6・5)

「アラブ同盟を構成しているアラブ国家は非常に野心的であり、ヒトラーを手本と確信している。……(中略) ……イギリスは、一九三八年にナチの汎ゲルマン主義に抵抗しなかったと同じように今は汎アラブ主義に抵抗しないている。イギリスがシリアでフランスに課している《強制》は、彼の国がミュンヘンでチェコスロバキアをしてドイツにズデーテン地方を譲らせたことと好一対をなしている」(Max Andre 論説。L'Aube, 6・5)

「ベルイトで二新聞がレバノン政府によって発行を停止された。……(中略) ……この《禁じられた》ジャーナリズムの罪は何か。アンテ・オキア及び全オリエントのマロン派総大司教アリダ (Arida) 殿下が Le Monde 紙に宛てた手紙 (七月二〇日付に

掲載）を転載したのである。信仰と言論の自由に対してのように挑戦し、レバノンで最も敬愛されている権威に対して意見表明の権利を認めないからには、この同じ権利この同じ自由の名において世界を煽動してから数週間後、ペイルート政府は総大司教の手紙に、反乱や武装蜂起のアビールのような最も堪え難い挑発を発見したのだと信じないわけにいかない。だが、狼下のメッセージをいかに読んでも、見つけられるのは次のような宣言だけである。『……（中略）……レバノンの独立が、いつもキリスト教徒の利益に配慮を示したフランスによって守られることを望みます』（Maurice Schumann 論説。L'Aube, 7・26）

「九月十五日シリア議会で激しい外国学校攻撃の演説がおこなわれ、それを受けて（シリア）首相は学校閉鎖措置を示唆した。このような措置は反民主的で、シリアとレバノンでフランス学校が成し遂げた業績を完全に無視することに他ならぬ」（Le Figaro, 9・21; La Monde, 9・22）

「一九三三年、イラク北部のキリスト教徒山岳民族アッシリア人が政府軍部隊によって虐殺され世界中を憤慨させた。一九四一年五月はユダヤ教徒原住民の番で、彼らはこれまで中東が経験したなかで最も恐ろしいボツロムの犠牲となったのである。略奪・暴行・虐殺は興奮しきった下層民の仕業ではあったが、軍隊と警察もそれに荷担していた。そしてついこの前には、クルディスタン地方が弾圧のために血の海になった。勤勉で知的民族であるクルド族は確かにイスラム教徒ではあるが、その民族感情は常に抑圧されてきたのである。……（中略）……フランスとイギリスがオリエンタから撤退すれば、何百万もの人々が衝動的住民の掌中に投げ出されることになるのだが、彼ら住民を制動する文明のブレーキはまだ不完全である」（Le Monde, 11・25）

そして最後に、「文明化の使命」を謳う第六の論点が駄目を押した。フランスの支配の目的は、第五の論点が強調する非民主的・ファッショ的・暴力的なアラブ・イスラム世界を文明の進歩へと導くことであり、またその成果もあがっていた、というのである。

「フランスはレヴァントにあって無私無欲であり続けた。この精神に基づいてフランス当局は、大事業を企画し、新しい学校を建て、課された義務を果たしたのである。……（中略）……レヴァントのフランス総督は、民主制度を発展させ、シリアとレバノンに近代国家の概念を徐々に手ほどきするよう努めてきたのである」（Le Figaro, * 11・5-6）

「このオリエントにおいてフランスは、知的、精神的、道德的影響によって、またアラブ世界との特別な連繫によって、数世紀このかたすぐれた役割を果たしてきました。……（中略）……委任統治の目的は、アラブ諸国を独立と、経済的發展および文明の進歩へと導くことにあるのです」（六月二日ド・ゴール記者会見。Le Figaro, 6・3・4；Le Monde, 6・5）

「レヴァントにおけるフランス文化の優位を破壊しようとする動きが展開されているこの時にあって、レヴァントにおけるフランスの影響力はフランソワ一世とコンスタンティノーブルのスルタンとの間のカピトレーション締結、さらには十字軍にまでさかのぼることを想起するのは時宜をえないことではないだろう。この仕事を数世紀かけて成し遂げた後、フランスは、一九二三年国際連盟によって認められるところの彼の地に対する委託を受け、住民の幸福のためにその委託を展開することを誓い、そしてこの誓いは守られた」（L'Aube, 6・14）

「一七八九年の民主的原理が、レヴァントにおけるフランスの使命に根拠を与えてもいる原理に他ならない。……（中略）……フランスはレヴァントに貢献をなした。例えば道路、鉄道、ダム、港、病院、学校等々。……（中略）……人間性は普遍的概念だが、その質の程度は民族毎に様々異なっているのが当然だと思われる。この意味合において、若干の民族には独立への歩みの過程で指導を受ける必要が依然としてあるのだが、われわれを突き動かしているのは、人種主義的偏見でも《主人》意識でもなく、まさに人間主義的価値観なのです。……（中略）……文明とは各民族がそれぞれに持ち合わせている人間主義的価値の各総量を示している、という考え方は、民族間の区別を可能とし、文明に恵まれた民族が文明を他の民族に伝える権利と義務を認めるものである」（L'Époque, 6・20）

「（六月十九日諮問議会で、共産党同伴者コット Pierre Cot が、ド・ゴールのレヴァント政策を非難したのに応えてド・ゴールは次のように反論した。）貴君はフランスがシリアとレバノンで実現した事業について触れられませんでした。われわれが彼の地に持っている影響力についても、われわれが彼の地に造った道路・鉄道・学校・病院・堤防・港についても、貴君は一言も触れられませんでした」（Le Figaro, L'Aube, 6・20；Le Monde, 9・21）

この一から六の論点、「文明化の使命」を確信こそすれそれに疑念を抱くことなどできないような論点、換言すれば

世論調査(I) 1945年6月1—13日実施

【質問】	シリアで今起きている事件の責任は誰にあると思いますか (単位%)
	イギリス.....65
	イギリスとアメリカ.....3
	ドイツ.....3
	フランス.....3
	アラブ社会.....2
	相互の錯誤.....4
	経済的原因.....7
	他の回答.....1
	意見なし.....15
	(複数回答した者あり)

Bulletin d'Infomation, I. F. O. P., 16 juillet 1945, p. 141.

ランス支配の罪過を自覚し帝国意識から自らを解放するうえでこの大きな障害を、フランス国民は幸いにも乗り越えられたのだろうか。この間に応えてくれる史料は極めて少ないのが実状である。しかし僅かな史料と言え、それら全てがみな否定的応えであることもまた事実である。リヨンとマルセイユの両アメリカ領事館がパリの同国大使館宛に送った報告書は、新聞報道を通じてフランス国民が騒擾の責任はフランスにはないと考えていた様子を次のように伝えている。

「(共産党系の)『人民の声 (La Voix du Peuple)』を除き、リヨン地域の新聞はすべて、シリア問題に関して政府を支持している。

シリア事件のために、個人個人のイギリス非難はますます激しくなってきた。どの外国人に対してもフランス人は、この問題について思うところを自由に述べるだろう。そして一般民衆は、『不実なアルピオン』^⑤という言葉を再び使っている」(六月十九日付)

「イギリスに対する非難は、マルセイユ市ばかりでなく、副領事が先日巡回を終えたばかりの本領事館管轄下の地域一帯に広がっ

ている。このような事態が生まれた理由としては、第一に、シリアにおけるイギリスの行動が専横で屈辱的なものであるとの新聞報道が考えられる」^⑦

(六月二〇日付)

そして世論調査(Ⅰ)も同様の状況を物語っている。騒擾の原因はイギリスを筆頭とする外国勢力にあり、フランスはもちろん原住民自身にもないとフランス国民の大半が考えていた事実は、フランスは文明的で原住民からも感謝されているという「文明化の使命」論に彼らがいかに深くまぎとられていたかを示している。

フランスは無罪だという意識が国民大多数をとらえていたことは間違いないだろう。そして、フランス支配の罪過をこのように自覚できなかったからには、レヴァント原住民の反仏感情の噴出とフランス軍による

文明とはかけ離れた武力弾圧という現実にもかかわらず、「文明化の使命」論への疑念は生まれはせず、帝国意識からの解放は望むべくもなかった、と言っても差し支えないだろう。

- ① 村上・山崎訳『ドゴール大戦回顧録(Ⅲ)』一九六三年、みすず書房、一四九頁。
- ② *Foreign Relations of the United States* (以後F. R. U. S. と略す): *Diplomatic Papers, 1945, vol. 3, 1968, pp. 1058-59.*
- ③ *Ibid.*, p. 1060.
- ④ *cf. Ibid.*, p. 1065.
- ⑤ 『ドゴール大戦回顧録(Ⅱ)』一九六一年、一九四〜九五頁。回顧録では五日付だが実際は四日付。
- ⑥ *cf. F. R. U. S., op. cit., p. 1080.*
- ⑦ *Ibid.*, p. 1093.
- ⑧ *Ibid.*, p. 1079.
- ⑨ *Ibid.*, p. 1088.
- ⑩ *Ibid.*, p. 1113.
- ⑪ *Ibid.*, p. 1114.
- ⑫ A. B. Gannoun, *The Anglo-French Clash in Lebanon and Syria, 1940-45, 1987, p. 174* 引用。
- ⑬ 『ドゴール大戦回顧録(Ⅱ)』二〇六頁。
- ⑭ 同上書、二〇六〜二二二頁。
- ⑮ 同上書、二〇三〜〇四頁。
- ⑯ *Confidential U. S. State Department Central Files* (以下C. U. S. S. D. C. F. と略記), *France: Internal Affairs, 1945-1949, Part 1, Political, Governmental, and National defense Affairs, Reel No. 2, pp. 251-252, (University Publications of America, 1986).*
- ⑰ *Ibid.*, p. 231.

二節 ベトナム八月革命

日本軍進駐(一九四〇年九月)以降も対日協力することで命脈を保っていたフランス(ヴィシー派)のベトナム支配も、ついに一九四五年三月九日全壊した。日本軍がフランス軍を武装解除したのである(明号作戦)。軍関係を含む膨大な資料を検証したエレン・ハマーによれば、フランス軍は、北部、とりわけランソンとドンダンでは激しく日本軍に抗戦したのち投降したが、中部と南部では実効的抵抗もおこなわず投降、全体としては結局、「分散したしかもささやかなレジスタンスにすぎなかったという事実は隠しおおせなかった」。また、北部にあったフランス軍の一部がラオスおよび中国国境線地帯に避難し、そこで山岳部族(メオ、タイ族等)の「友情を受けた」後、最終的には中国へ逃亡した^①。

日本軍は傀儡バオ・ダイ政権をフェに樹てる。しかしその支配の実状は「点と線」でしかなく、フランス植民地体制瓦解後の広大な「面」では、北部を中心に、今や唯一の敵となった日本ファシズムを打倒し独立を目指すベトナム（ベトナム独立同盟）の解放区化が急速に進んだ。この事態を当時のアメリカ國務省報告書（六月二日付）は次のように評価している。

「独立への思いがますます大きくなりつつあるようにみえる。インドシナ独立連盟（ベトミンをさす）は、およそ十の原住民政治団体を代表しており、二五万から五〇万の間の人員を擁し、相当の影響力を持っているように思われる」^②

同様に、日本軍側の資料に基づく戦史研究にも次のような指摘がある。

「（六月頃）軍司令官土橋中将は、（バオ・ダイ政権の）トンキン州の欽差大臣としてハノイに来ていたファン・ケ・トアイ及び新たにハノイ市長となったチャン・バン・ライが共に大のフランス嫌いであり、また一般民衆がベトミンを祖国独立の闘士、真の愛国者と認めており、ベトミンに同情こそすれ、ベトミンの運動を弾圧することは非愛国的行為であると考えていることを知り、前記の二人を通じてベトミンとの妥協工作を考えた」^③

日本軍に抵抗するフランス軍は軍隊内の原住民兵の忠誠とせいぜい山岳部族の「友情」しか得られなかったが、ベトミンには幅広い民衆の支持が寄せられていたのである。

一方フランス臨時政府は三月二四日声明を出し（二五日に急進社会党所属植民地相ジャコビ Paul Giacobbi が二度にわたってラジオで発表）、戦後は自治をインドシナに与えると約束。しかしその「自治」の中身は、フランス政府任命の総督がインドシナを「主宰」し、「対外利益はフランスによって代表される」など、ベトミンの要求である完全独立とは大きくかけ離れていた。^④ベトミン指導者の一人はこの声明を次のように評している。

「ドゴール政府がインドシナの自治を承認する宣言を発表することに同意したのは、インドシナでフランスが降伏した直後であった。この偽善的宣言は、フランスがインドシナでなんら権威をもちえなくなったまさにその時に発表されたために、インドシナ人民にとってはまったくばかばかしいおわらい草であった」^⑤

そして八月革命。日本のポツダム宣言受諾という情勢下ベトミンは一斉蜂起し、日本軍に武器引渡しを求めつつ権力奪取に乗り出す。一方、敗戦に呆然自失状態の日本軍は、一部ではベトミンに武器を渡したり、あるいはベトミンの手に渡らないよう武器を処分したりと地域によって行動のばらつきはあったが、全体としてはベトミンのこの動きに抵抗せず「好意的な中立」^⑥を守った。ベトミンは、まずハノイ入城（8・19）を果たし、ついでフェではバオ・ダイを退位（8・28）に追いやり傀儡政権を霧散させた。またサイゴンではベトミンが他の勢力（カオ・ダイら宗教勢力とトロツキスト等）と組んで作った南部委員会が二八日権力を掌握。かくして九月二日、ベトナム民主共和国の独立がハノイで宣言される。その宣言は、アメリカ合衆国独立宣言とフランス革命人権宣言を称揚しつつ個人と民族の「自由・平等・友愛」実現を訴えていた。実際、八月十三日にベトミンが決めた十大政策は、フランスレジスタンスの統一綱領（全国レジスタンス評議会綱領）と同様、他民族からの解放と自由・平等・民主主義の徹底を内容としていたのである。そして民衆はこの八月革命に歓喜した。朝日新聞記者としてこの革命を目撃した丸山静雄は次のように証言している。

「日本軍が軍事管理の責任をとっていたときには子供と老人が見えるだけで、青年男女、特に娘さんの姿はほとんど目に入らなかった。……（中略）……ところが日本軍が降伏してベトミンが村に町に現われると、これは、どうしたことであろう、娘さんまで現われ、老いも若きも黒山のような人だかり、忽然と出現した人間の大集団、それが『ドク・ラップ』、『ドク・ラップ』と叫びながら通りを練り歩く、降ってわいたような独立に歓喜する民族の大行進である」^⑦

この間フランス臨時政府はインドシナ遠征軍（高等弁務官ダルジャンリユー Georges Thierry d'Argenlieu、最高司令官ルネール Philippe Leclerc）の編成に取り組み、九月十二日、第一陣五〇〇人がイギリス軍と共に空路サイゴンに到着する。三月九日以降軍事力の後楯をなくし原住民の反仏行動（略奪、暴行、食料品不売等）に憤慨していたサイゴンのフランス人居留民（約二万人）は欣躍して迎えた。そして二三日未明、フランス軍は南部委員会が掌握していた市役所・警察署・駅等の公共建造物と重要交通路を急襲・占拠、夜が明けるとフランス人居留民によるベトナム民衆への暴行も始まった。目撃した

イギリス将校は次のように報告している。

「九月二三日、日曜日朝のクーデターの方法とフランス市民の態度が、アンナン人による報復措置を招くことを絶対確実としたことはまことに不幸であった。フランス市民は確かに過去数ヶ月間にわたりアンナン人によってかなり苦しめられてはきたが、感情に走った一部のフランス市民はこの機会をとらえ、できる限りの報復手段をとった。アンナン人は、たんにアンナン人であるというだけの理由で捉えられ、逮捕後の取扱いもとくに残忍ではなかったにせよ、必要以上に乱暴なものであった」^⑤

翌二五日、今度はベトナム人の一団がサイゴン市内のフランス人居住区シテ・エロー (Cite Héraud) を襲撃、婦女子を含むフランス人を殺害し略取した。そして十月初め、遠征軍主力が海路サイゴンに到着。この時ルクレールは次のような書簡 (十月十三日付) をド・ゴール宛送っている。

「騒乱がこれほど激しく、重大で広汎な理由は、フランスは敗北したのだとみなされているところにあります。一九四〇年に敗北し、そしてまた四五年三月に敗北したのだと。この確信を霧消させることが、この国でフランスを回復させる絶対不可欠の条件であります。これをどのようにおこなうのか。われわれの軍事力を示すことによってであります。したがって、軍事力を示す前にベトミン代表と本格的に交渉するのは絶対的誤りでしよう。…… (中略) ……南部よりも困難な北部の問題をいかに解決すべきかについてですが、それには唯一の手段、トンキンに力づくで上陸することしかないと考えます。トンキン原住民は抵抗するでしょうが、問題はすぐ片付くでしょう」

この書簡に対してド・ゴールは二七日付で「貴官の考えは適切であります」と返信した。^⑥かくして、完全独立を求めるベトミンと、それを認めないフランス軍の、以後一九五四年まで続く軍事対決が始まったのである。

対日協力のフランス植民地当局 (ヴィシー派) が捨てた反ファシズムの旗を、抗独レジスタンスのフランス国民と同じようにベトミンが掲げ、そしてフランスの苛酷な植民地支配が産みだした民衆の反仏感情を背景に展開されたこの八月革命に対して、フランス臨時政府は武力でもって応えたわけである。従って、この八月革命とそれへのフランス臨時政府の対

応は、フランス国民に、フランス支配の不当性を自覚させ帝国意識からの解放を促す好機でもあった。しかしレヴァント同様ここでも四紙が伝える情報は歪曲されていた。

まず第一に、フランスは自由で平等で民主的なのだからベトナム民衆もフランスに好意を寄せている、あるいは寄せるだろう、と信じ込ませる「文明化の使命」論の洪水。臨時政府主催テト正月祝典(2・15)等の機会をとらえて、従来の植民地支配も、そして戦後のフランス支配復活を予定する三月二四日声明も、さらには遠征軍派遣自体までもが、インドシナ民衆に対して「文明化の使命」を持つフランスの寛大さを示すものに他ならないと喧伝された。

「住民、とりわけ、多くの才を示すエリートの献身的協力を得てこれまでかの地で実現したことを誇りに思いつつ、フランスは、インドシナ連合の政治・経済・社会・文化の発展、つまり、自己の力を甦えらせ自己の偉大さを回復せんとするフランスの活動の主要目標の一つを成し遂げたいと望んでおります」(テト正月祝典でのド・ゴール演説。 *Le Figaro, L'Aube, 2・16*; *Le Monde, 2・17*)

「(三月二四日声明の約束にしたがい) 文明の民主的・社会的発展を基礎としインドシナ人民とフランス人民が相補い互いが豊になる組織が、古い植民地機構にとって代わるだろう」(*L'Aube, 4・11-2*)

「フランス文明がアンナンの繊細で優美な草木に接ぎ木され、そして既にあらゆる領域で果実をつけ始めている。……(中略)

「……インドシナがまともな文化を形成するのを助けたフランスは、インドシナが解放されるのをまた助けに行こうとしている」(*L'Aube, 6・24-25*)

「(ルクレール部隊は) わが植民地帝国の精華に対する献身的で寛大な主権をフランスがさらに強く確認するのを助けんとする断固とした決意と、そして最大級の楽観主義でもって、母なる祖国を離れようとしてゐる」(*L'Aube, 9・6*)

「六〇年以上前からフランスはインドシナの発展に努力を傾注し、時間を無駄にしたことはありませんでした。この国の繁栄がこれを証明しています。この繁栄と、一八七〇年頃のインドシナの無政府状態とを比較すればわかることです。卓越した総督たちの

おかげで極東のフランス植民地は、経済・文化の二重の面で急速かつ相当な発展をみたのです」(シャンドルナゴルでのAFP特派員とのダルジャンリュール記者会見。Le Figaro, L'Aube, L'Époque, 9・20)

「高貴な旧きアジアにおいて友情に満ちた影響力をフランスは行使できるようにならねばなりません。インドシナを自由と繁栄の道へ導く可能性をフランスは取り戻さなければなりません」(九月二二日、ド・コールのラジオ演説。Le Figaro, L'Aube, L'Époque, 9・23-24; Le Monde, 9・25)

「(一〇月一九日の記者会見でインドシナ関係閣僚委員会事務局長の)ド・ランシラド(François de Langlade)氏は、約一世紀にわたってインドシナでわれわれの医師、宣教師、建築家、技師、学者が成し遂げた業績と、さらに政治分野で総督たちがおこなった改良についての攻撃がどれほど不当なものであるかを強調した」(Le Figaro, 10・20)

「アンナン人はおそらく一致して自治権を望んでいる。フランスのおかげで政治が徐々に成熟するようになった民族がこのような希望を持つことを、フランスは正当なことだと認めている。一九四五年三月二四日の政府首班声明がこのことを立証している」(Le Figaro, 11・7)

「われわれがここにやってきたのは、インドシナが依然としてフランスを必要としており、またフランスがインドシナを愛しているからであります。フランスは、物質的・金銭的利害心ではなく人間愛に導かれてやって来たのであります」(サイゴン南西ミートでのダルジャンリュール声明。Le Monde, * * 1・13-14)

そして第二は、八月革命勃発の報がまだない段階で、ベトナム民衆もフランスに好意を持っており戦後のフランス復帰を望んでいるのだ、という虚構が次のように喧伝された。

「このドラマ(第二次世界大戦)以前にインドシナ連合でわれわれが実現した事柄と、かの地の民族が彼ら自身不幸の中にあっても不幸なフランスに示した忠節とが、敵によってわれわれから強奪された全てのものを回収する権利が正当なものであることを証明しているのであります」(一九四四年十一月二二日諮問議会における、ド・コール演説。Le Figaro, * 11・23)

「(テト正月祝典で)植民地相はインドシナでのフランスの文明化活動を高く評価し、その活動ゆえの忠節の証が一九四〇年以来

数限りなくフランスにもたらされると強調した」(L'Aube, 2・16)

「敵はインドシナにおけるわが軍の障壁をうち壊したく思うのでありましようが、わが軍は、縮小し、四散し、補給不十分とはいえ、住民の援助を受けて、敵軍に対して敢然とこの障壁を押し立てているのであります。……(中略)……実際いままで、インドシナ連邦はこれほどまでに北方から来た敵にはむかつたこともなく、これほどまでにあらゆる領域において、すなわち、政治、経済、社会、文化、道徳など、その大いなる未来がインドシナ連邦をまちうけている領域において、それ自身の発展の条件を、フランスの助力のもとにみずからのうちにみつけ出そうと決意したこともありませんでした」(一九四五年三月十四日ド・ゴールのラジオ演説。Le Figaro, L'Aube, 3・15; Le Monde, 3・16)

「われわれの美しい植民地が敵に対しておこなっている抵抗の中に、勇敢な戦士の不屈の闘志ばかりでなく、理想的住民像をも読み取れる。彼ら住民は、栄誉と繁栄の道に導く能力と資格を持つと彼ら自身が考える国に対しては徹頭徹尾信頼を寄せることにしたのである」(Le Monde, 5・6)

「この決定的な現在、母なる祖国はインドシナ連邦の子供たちにむかって、その喜びと、氣遣いと、感謝のしるしを送る。インドシナの息子たちは、侵略者をまえにしたときのその態度によって、フランスに対するその忠誠によって、彼らが、より広汎な、より自由な国家として存在するにふさわしいことを示した」(八月十五日ド・ゴールによるインドシナ向けメッセージ。Le Monde, Le Figaro, L'Aube, L'Epogue, 8・16)

「敵日本軍の圧制に苦しんでいるインドシナは、實質的にフランス連邦に協力することはまだできませんが、きつと、苦しんだだけにいっそう親しみをまし、またそれに価するようになったがゆえにいっそう自由な国として、フランス連邦にもどってこようとしております」(ラジオ放送された八月十一日バード・カレー県ベテヌスにおけるド・ゴール演説。Le Figaro, L'Aube, L'Epogue, 8・12-13; Le Monde, 8・14)

「ラオスもカンボジアも、そして、日本人に奉仕していたバオ・ダイ帝の退位が伝えられるアンナンも、フランス共同体の中にインドシナが復帰することが民族感情を自由に主張する最良の方策であることを良く知ってゐる」(Le Monde, 8・31)

第三は、四紙が喧伝したようにフランスは自由で平等で民主的でベトナム民衆もフランスに好意を持ちフランスの復帰を望んでいたとするなら、それでは一体なぜフランスからの独立を目指す八月革命が今現在起こっているのかという問題。これは、ベトナムに武器を与えるなどファシスト日本の陰謀が原因なのだと、次のように説明された。

「インドシナの独立のために闘っていると主張している煽動者らは、実際には日本の手先でしかなく、日本側に金で雇われ武器をもらっている」(Le Figaro, L'Aube, 9・7; Le Monde, 9・8)

「われわれの旧世界を席捲し多大な被害をもたらした後、民族主義の波が最遠の地に激しい勢いで押し寄せている。……(中略)……世界大戦の終結で、アンナン民族主義の猛毒さが暴露された。……(中略)……ベトナムは日本と協力しなかっただろうか。

ベトナムが持っている武器は日本軍によって手渡されたものではなかっただろうか」(L'Aube, 9・11)

「インドシナの日本占領軍によって保護されているベトナムの暴虐さは、非妥協的民族運動はどこでも常に、ごく稀な例外はあるが、外国の手先であり外国狂であるという経験的事実をいま一度明らかにしている」(L'Aube, 9・17)

「フランスの権利を承認させるうえで最初の困難は、ベトナムの中に集まっているインドシナ民族主義者の煽動によって生じているが、この煽動は日本人によって動かされていると思われる。日本人はかなり大量に暴徒一味に合流したようである。フランス人は暴行され、虐殺されたものさえた」(Le Figaro, 9・19)

「ベトナムと日本人との結託はかなり前から目だっていた。日本人は武器と金をベトナムに分配してきた。日本人の究極の目論みは、撤退する各国で混乱をつくりだす日にか再びそこから利益を引き出せるような形で敗北を組織することなのだ」(Le Monde, 9・21)

「現在の混乱の原因は、アンナン人を武装し彼らに知恵を吹き込んでいる若干の日本人の行動にある」(L'Époque, 10・3; Le Monde, 10・4)

「日本の兵卒と士官のかんりの部分が武器を携行して《地下に潜り》、ベトナムのゲリラ隊に《工作を施した》。……(中略)……ベトナムは現在日本の軍隊に依存しており、その日本軍は戦いを止めることを望まず、西洋列強に対するこの戦いを遂行するため

にアンナン人少数派の過激民族主義を利用せんとしている。したがって、フランスに対するベトミンの武力敵対は、結局のところ、極東における日本の最後のあがきでしかなく、アンナン独立の旗を掲げているかのよう装っている連中は、意識的であるかないかにかかわらず、外国の陰謀の手先に過ぎないのである」(Le Figaro, 10・14・15)

「ミート周辺に日本の対戦軍用の柵が構築され、また橋も吹き飛ばされたという事実は、日本人がベトミンを援助していることを証明している。日本軍部隊がベトミンの隊列の中で戦っているという噂が多く流れている」(L'Époque, 10・30)

「ホー・チ・ミンは日本人から金銭の援助をもらっていた。そしてその日本人がホー・チ・ミンを先の八月に権力の座に押しやったのである」(Le Figaro, 11・12)

さらに第四が、住民への食糧補給というフランスの申し入れを拒否し、また住民を偽るなど、フランスと違い、ベトミンには統治の資格や能力さえないという、次のような論点である。

「アンナン人の過激分子の政策は、フランス政府の真意を住民に隠し外国人嫌いの騒乱を持續させようとするものである。……

(中略)……北部諸州では、まさに第五列と呼ぶべき者の政策は、現地住民を騙そうとするものであり、それは一定の成功をおさめている。……(中略)……トンキン地方の飢餓の脅威を取り除くためにフランス政府が練り上げたプランの執行を今妨げているのは、政治次元の反対に過ぎない。米生産の最大中心地であるコーチンナからトンキンへ必要な量を移送するとフランスは申し入れた。しかしベトミン当局はこの提案を拒絶したのである」(Le Figaro, 10・2)

「船がフランス軍部隊と一緒に運んでくるという口実で、アンナン人は食糧補給をサボタージュしている。物質的困難を増大させ騒乱を挑発するというのが過激派の目的のようだ」(L'Époque, 10・4)

「日本の暴力発動(三月九日)の後、『民族主義者』一味は組織的略奪と破壊行為にふけた。そのために、とりわけトンキン地方の病院網の再建を考えなければならぬ状態になっている。また、フランス人責任者の排除の後、アンナン人当局の怠慢ゆえに大災害もおこった。紅河の堤防が七ヶ所で決壊しトンキン地方全域に未曾有の被害をもたらした根本原因は、この怠慢に他ならぬ」(Le Figaro, 11・11-12)

「ハノイ政権が米移送のわれわれの申し入れを拒否したのは本当なのでしょいかと、ダルジャンリュウ提督に質問した。『確かにそうです。また住民は、既に春の段階でかなり飢えに苦しんでいたわけで、その原因が三月九日にフランス行政組織が消滅したことにあることをよく知っています。われわれとしては、飢餓解消に全力を尽くす覚悟です。……（中略）……もし北の政権と南の自称指導者が住民の生存条件にいくらかでも配慮しているならば、煽動者が貯蔵米、工場、ゴム、国家財産、貨幣、輸入品を破壊するのを、黙認したりしないはずなのだ』」（特派員電。Le Figaro, 12・26）

したがって第五。やはり一般民衆はこのようなベトミンの支配ではなく、自由で平等で民主的な文明国フランスの統治こそを望んでいるのだと、次のように主張された。

「一世紀半以上前からインドシナは、フランスをその仕事で判断してきた。インドシナは、やがてルクレールがトンキンからカンボジアまで喜びをもたらしつつはためかせられるだろうわれわれの三色旗を、自由の象徴として歓迎するだろう」（L'Epoque, 9・6）

「日本の政策の基本は常に、インドシナ人のある社会集団にみられる独立への動きを悪用することでした。しかしアンナン人の多くはこの動きに追随せず、とりわけコーチシナではフランス行政機関の復帰が強く望まれています。トンキンでもベトミンのゲリラ隊は抵抗に逢着しており、住民の多数派はフランスの復帰を求めています。ベトミンの中でさえ意見の一致にはほど遠い状況であります。従って、インドシナ独立運動は一致団結したものではありません」（前掲ダルジャンリュウ記者会見。Le Figaro, L'Arabe, L'Epoque, 9・20; Le Monde, 9・21）

「ベトミンのゲリラ隊は、不当な徴収と強盗行為をはたらいっているために、インドシナ住民全体から恐れられ憎まれている」（Le Figaro, 10・14・15）

「ダルジャンリュウ司令部からの情報によると、ベトミンがインドシナ住民の圧倒的多数の意思を代表していないことは日毎明らかになっている。住民の意思は、フランス人が復帰して、アンナン政権が助長している略奪と不当徴収に終止符が打たれることを望んでいる。トンキンでは、他の地域以上にこの略奪で住民は苦しんでいる。給与が支給されないのでアンナン人の官吏の多くが離反してついで」（L'Arabe, 10・16; Le Monde, 10・17）

「尋常な時代であれば、武力に頼らなくともインドシナ問題は急速に解決されるだろう。というのも実際のところ、住民は皆われわれに敵意を持っていないと考えられるからである。その証拠に、日本が影響力を發揮できなかったカンボジアとラオスでは、どんな独立運動も認められなかった。両地では、われわれの復讐が待ちこがれてさえている。コーチシナについて言えば、住民は、合流した時と同じような平然さでベトミンから離れていくことだろう」(Le Figaro, 10・21)

「住民は秩序と平穩、安全の回復こそを望んでいる。ダルジャンリュウ提督の最近の電信報告によると、住民は、自称アンナン共和国政府が助長するか、または防止できないでいる略奪と不当徴収を終わらせるためにフランス人が復讐することを願っている」(Le Figaro, 11・7)

「ルクレール軍の志願兵がわれわれの三色旗とともにインドシナに再びもたらそうとしているフランスの秩序こそ、静かに働きたいと何にもまして願っている原住民大衆が待ちこがれているものである」(L'Epoque, 11・25-26)

「フランス軍部隊の占領でベトミンの報復の恐怖が十分に取り払われた暁には、アンナン人住民は大挙してわれわれのもとに戻つてく」(Le Figaro, * * 1・3)

そして最後に、四紙とも、フランスのレジスタンス統一綱領と精神を共有するベトミン十大政策や、フランス人権宣言を称揚するベトナム民主共和国独立宣言を紹介せず、また、フランス遠征軍とフランス居留民による暴行も一切報道せず、ベトナム人ないしベトミン側の武力発動のみを次のように俎上にのせていたことも言い添えておく必要があるだろう。

「九月二三日、南部委員会支配下の）建物を包囲した後、フランス軍は降伏するようアンナン傀儡政府（南部委員会）を威圧した。傀儡政府は狙撃兵に発砲を命じてそれに応えた。そのためフランス軍は攻撃に移つたのである」(Le Figaro, 9・25)

「(サイゴンで) アンナン人は巧妙に身を隠しつつ、敢えて街頭に出たフランス人・イギリス人・アメリカ人を銃撃し続けている。……(中略)……月曜日(九月二四日)は全くの暴動の日だった。フランス人兵士一名が原住民によって射殺され、下町の商業地区では民間人一名が短刀で刺し殺された」(A P電。Le Monde, 9・27)

「トンキン方面共和国委員サントニー(Jean Santeny)氏のハノイからの報告によると、三月九日から十月三〇日までのフラン

ス人の損失は、民間人二〇一名が殺害され、行方不明は三六名にのぼった。この一〇一名のうち、五〇名が日本人、五一名がアンナン人によって殺害された」(Le Monde, 11・24)

「フランスのインドシナ政策を非難した十一月十八日付 New Herald Tribune 紙は)サイゴンのエロー地区でフランス人一二五名が虐殺され、妊婦は腹を裂かれ、『ほれ、お前のガキだ』と叫びながら虐殺者が胎児を彼女の腕に放り投げた、ということを知っているのだろうか。目を潰された子供らが、殺された両親を求めてあげた叫びを聞いたのだろうか……(中略)……鼻を粘土で塞ぎ、腹が破裂するほど無理やりに水を飲ませるといふ、フランス人に加えられた扱いをどう思っているのだろうか。その後彼らフランス人は水を吐かされ、そしてまた同じ拷問が窒息するまで繰り返される。これはもうナチの水責め以上だ」(L'Epoque, 11・25-26)

「九月二〇日のことだった。虐殺の嵐がインドシナに吹き荒れた。フランス人が寄り集まっていた所ではどこでも、刃物か銃器で武装した集団が突然現れ、フランス人は、死ねと叫ぶ黄色い顔の人間に取り囲まれたのである。通常はおとなしく礼儀正しいアンナン人が、人殺しの狂気にとらえられたのだった。この激情の爆発を押し止めることは、嗚呼、どこでも不可能だった。そして多くのフランス人が、ベトミンの権力奪取のために命を奪われたのだった」(Le Figaro, 12・4)

「九月二日サイゴンで大規模反仏デモがあり、フランス人が五名街頭で殺され、フランス人の家屋二〇軒が略奪された。……(中略)……(コーチシナ方面共和国委員セディール Jean Cédille の話によると)『もし九月二三日にわれわれが行動にでていなかったとしたら、われわれはすぐに拘束され、そして必ずや虐殺されていただろう。』……(中略)……ベトミン兵は、われわれに好意を持っていると嫌疑をかけたアンナン人に復讐を数々おこなっており、恐怖がコーチシナを支配している。これはもう戦争だ」(Le Figaro, 12・21)

以上六点の報道内容をまとめると、(1) フランスの統治は自由で平等で民主的で、(2) ベトミンの騒乱の黒幕は日本ファシストで、また、(3) ベトミンには統治の資格と能力に欠けているのだから、(4) 一般民衆はベトミンではなくフランスに期待している、とフランス国民に信じ込ませるものであり、さらに、(5) 八月革命の目標はフランスレジスタンスのそれ

世論調査(Ⅱ) 1945年9月10-15日実施

〔質問〕	フランス領インドシナはフランスの手に残されると思いますか。	(単位%)
肯 定	63
否 定	12
意見なし	25

Sondages, I. F. O. P., 1^{er} octobre 1945, p. 182.

世論調査(Ⅲ) 1945年10月実施

〔質問〕	インドシナ紛争の責任はどこにあると思いますか。	(単位%)
日 本	36
イギリス	12
中 国	9
アメリカ	6
インドシナ	5
フランス	5
他の回答	12
無 回 答	30

(複数回答した者あり)

Sondages, I. F. O. P., 1^{er}-16 mars 1947, p. 59.

と同じであったことを知らせず、(6) ベトナム側が一方的に暴行を働いておりフランスは被害者なのだと思わせるものであったと言えるだろう。かなり事実とはかけ離れた報道であった。日本軍のベトミン支援という論点についても、その正確な規模・内容については今のところ不明で、また確かに武器の引渡しや日本人兵士の合流という事実はあったようだが、^⑤四紙の報道は、その事実を誇大歪曲しベトミンと日本ファシストとを同列に置き、「反民主的」ベトミン像をフランス国民に植え付けるものであったことは否定できないだろう。

さて、このような歪曲報道にさらされていたフランス国民は、シリア騒擾と同様ベトナム八月革命をも歪められたレンズを通して見ていたのであり、当然フランス植民地主義の罪過を認識できないでいた。リヨンのアメリカ領事館がバリの大使館宛に送った報告書に次のような一節がある。

「ベテニューヌで最近ド・ゴールがおこなった演説(一〇四頁参照)の重要な部分は、インドシナに言及したところで、この部分でおくられた拍手喝采はフランスで帝国主義を是とする感情がいかに強いかを示している」(一九四五年八月二日付)^⑥

また世論調査(Ⅱ)は、フランス国民が原住民の忠節を信じ込んでいたことを示唆している。そして世論調査(Ⅲ)は、原住民の反仏感情噴出はフランスの政策の結果ではなく、外国、とりわけ日本の誘導なのだと思ひ込むフランス国民が多かったことを教えてくれる。シリア騒擾と同様、原住民の忠節を信じ、また、騒擾の原因はフランスにも原住民にもない

とフランス国民の多くが考えていたことは、フランスは文明的で原住民からも感謝されているという「文明化の使命」論に彼らが深くまぎとられていた様を示しているのではないだろうか。

結局、八月革命を通じて噴出した原住民の反仏感情という現実にもかかわらず、フランス国民の帝国意識からの解放は阻害されたと言えるだろう。

- ① Ellen J. Hammer, *The Struggle for Indochina*, 1954, p. 40. 邦訳（河合伸）『インドシナ現代史』一九七〇年、みすず書房、四五～四六頁。引用の一部は原書にしたがい訂正した。
- ② F. R. U. S.: *Diplomatic Papers*, 1945, vol. 6, 1968, p. 567.
- ③ 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 シンタン・明号作戦』朝雲新聞社、一九六九年、六八四頁。
- ④ 声明の邦訳は、『ド・ユール大戦回顧録（一）』一九六〇年、二八四～八六頁。
- ⑤ ベトナム民主共和国会議長チュオン・チン「八月革命」一九四六年（アジア・アフリカ研究所編『資料・ベトナム解放史 第一巻』一九七〇年、労働旬報社、三五二頁、所収）。
- ⑥ ハマー邦訳書一〇一頁。
- ⑦ 十大政策と独立宣言の邦訳は、陸井三郎編『資料・ベトナム戦争（上）』一九六九年、紀伊国屋書店、五七、六九～七一頁。全国レジスタンス評議会綱領の邦訳は、海原峻編『レジスタンス ドキュメント 現代史（8）』一九七三年、平凡社、二五一～二五五頁。
- ⑧ 丸山静雄「明号作戦と八月革命」『世界』三五九号、一九七五年一月、二六〇～二六一頁。
- ⑨ Supreme Allied Command, Southeast Asia, Commission No. 1, *Political History of French Indochina South of 16, 13 September-11 October 1945*. ハマー邦訳書二一五頁に引用。なお、この報告書や後掲四新聞の記事中の「アンナン」とは「ベトナム」をさす。
- ⑩ Paul Isoart, "Aux origines d'une guerre; L'Indochine française (1940-1945)", in *L'Indochine française 1940-1945*, 1982, p. 68 に引用。
- ⑪ 『ド・ユール大戦回顧録（Ⅱ）』一七一～一七四頁。
- ⑫ 同上書、二三〇頁。回顧録では十九日付だが実際は十五日付。
- ⑬ 同上書二七二頁。
- ⑭ この記事を含めて *L'Aube* 記事中の「ベトナム」とは、「ベトナム」の建てた国および政権をさす。
- ⑮ 吉沢南「私たちの中のアジアの戦争 仏領インドシナの「日本人」（一九八六年、朝日新聞社）、戸村盛雄「南方軍終焉の記」五三六頁（寺内寿一刊行会・上法快男編『元帥 寺内寿一』一九七六年、芙蓉書房、五三六頁所収）参照。
- ⑯ C. U. S. D. C. F., *op. cit.*, Reel No. 3, p. 485.

おわりに

レヴァントでみられた原住民の反仏感情噴出も、それに対するフランス軍の非人道的弾圧も、フランス国民に植民地支配の罪過を自覚させるには至らなかつた。同様に、約八〇年間のフランス支配に対する原住民側からの有罪宣告に他ならないベトナム八月革命も、フランス国民にその有罪性を自覚させるには至らなかつた。抗独レジスタンスの経験が未だ鮮烈な時期であつたにもかかわらず、フランス国民は他民族支配の罪過に気付くことができなかったのである。レヴァントでもベトナムでも、「文明化の使命」論や、その亜種であるフランス無罪論・被害者論、「植民地の民族主義者」反民主主義者」論等を内容とするド・ゴールの言説や四新聞の報道が、そのような自覚の形成を阻害し帝國意識からの解放の眞望を閉じた大きな一因ではなひだろうか。だとすれば、これらの言説や報道は、反面教師として、植民地支配の眞の姿を国民に知らせることが帝國意識払拭の大きな力の一つになることを教えてもいる、と言えるだろう。

ところでド・ゴールは、植民地原住民はフランスの支配を望んでいるのだと心から信じ込んでいたのだろうか。もしそうだとすれば、これまでみてきた彼の言説は、錯誤のなせる業だつたとして少しは免罪されるかもしれない。しかし事實はそうではなかつたようだ。当時中国の昆明にいたインドシナ北部臨時総代表アレッサンドリ (Marcel Alessandri) は、「一九四五年三月二四日声明よりもっとリベラルな調子の声明を、適當と思われる方法でワシントンにおいてド・ゴール將軍がおこなうことを提案する」との電文(八月二〇日付)を添えて、次のようなバオ・ダイ声明を本国政府宛電送し、そして兩文とも、その時ワシントンにいたド・ゴールのもとへ八月二六日付で回送されているのである。

「フランス国民に、私が青年時代を過ごした国に呼びかけます。また、フランス国民の首長であり解放者である方に呼びかけます。そして、国家主席としてというよりもむしろ友人として話したいと思ひます。皆さんは、死ぬほどの思ひで四年間苦しみました。それゆゑ、二千年の歴史と幾多の榮光に輝く過去を有するベトナム国民は、外国のいかなる支配も統治も甘受することをもはや望

まないし、できもしないということを、皆さんが理解できないことはないでしょう」(八月一九日バオ・ダイがラジオ・ベトナムを通じて、フランス国民並びにド・ゴールに宛てた声明)^①

しかしド・ゴールはアレクサンダリのこの進言を容れず、また、バオ・ダイ声明をフランス本土で公表することもなかった。^②

同様に、次のような政府文書の存在も知られている。

「実のところ植民地化一般が、脅威に曝されているばかりでなく、非とされているのである。植民地エリートの大多数が独立か、少なくとも自治を望んでいることは確かなことである」(一九四五年六月付植民地省内部回状)^③

フランスに比較的好意的なはずの「植民地エリート」やバオ・ダイでさえフランスからの独立を望んでいた。そしてド・ゴールはこのような原住民の民族感情を熟知していた一方でフランス国民にはそれを隠蔽していた、と言っても過言ではないだろう。

ともあれ、この時期に温存・強化された帝国意識は、その所有者の精神を蝕むだけでなく、一九五〇年代後半まで頻発し多大な出血と出費を余儀なくさせた民族独立運動弾圧を下から支えたことで、結局は、その所有者を含むフランス国民一般の命と経済生活をも脅かすことになった。

そして一方、このような事態をもたらした最大の責任者といえるド・ゴール本人は、一九五八年アルジェリア戦争の最中、この事態を解決する唯一の方策は強権大統領制の導入だと唱えて約十二年ぶりに政権復帰を果たす。その後、大統領権限が強化された新憲法が制定され第四共和制は瓦解、翌年一月ド・ゴールが大統領に就任し、以後フランスは彼の強権下に非植民地化を進めていった。ド・ゴールに言わせれば、第四共和制の政党政治には「感情的、習慣的および利害心にもとづく、一切の反対を超克し、必要とあらばそうした反対を粉碎することなど」できず、「非植民地化のような試みは、当然そのような反対をひき起こすに決まっていたのである」^④。つまり、政党から超然した強権大統領のド・ゴール自身の

みによってはじめてフランスの非植民地化は可能だった、というわけである。ド・ゴールの政党政治無力論の是非をここでは問わないが、一九五〇年代の当時、アルジェリアのコロンはもちろん、帝国意識に呪縛されていたフランス本土の反対勢力をも抑えて非植民地化を進めるための考えうる方策の一つが、ド・ゴールの言うような上からの強権的なイニシアティブであったことは確かだろう。

しかしド・ゴールのこの言葉は、十数年前の彼の言説の真の責任を知る者にとっては、あまりにも厚顔無恥に聞こえるではないか。

① 『Viet Nam Tan Bao』1945. 8. 20 不詳頁。Philippe Devillers, *L'Empire colonial 1944-1947*, p. 44, in *La puissance française Paris-Saigon-Hanoi: Les archives de la guerre 1944-1947*, 1988, p. 70 に引用。

② cf. *Ibid.*, pp. 72-74.

③ Ch.-R. Ageron, "La survivance d'un mythe: La puissance par

en question: 1945-1949, 1988. ④ 朝日新聞外報部訳『ド・ゴール 希望の回想』一九七一年、朝日新聞社、二〇頁。

〔付記〕 本稿の統編として「失われたもう一つの解放——一九四五年フランス国民の帝国意識」(静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇)第二六卷二号、一九九一年三月)が予定されている。統編では植民地全般を取り上げ、ドイツ軍占領の経緯に関わる問題を検討する。

なお、本稿は一九八九年度静岡大学教育研究学内特別経費奨励研究「戦後復興期フランスの国民統合」による研究成果の一部である。

L'esprit d'empire des Français en 1945 :
les émeutes en Syrie et la révolution d'août au Viet-nam
à travers quelques journaux conservateurs

par

SUGIMOTO Yoshihiko

Il se peut que nous traitions la IV^e République comme histoire des mouvements de libération nationale des peuples colonisés et des répressions colonialistes : les émeutes syro-libanaises et l'insurrection du Constantinois en Algérie (mai 1945), la guerre d'Indochine (1946-1954), l'insurrection malgache (1947), la guerre d'Algérie (1954-1962) et le reste. Les conflits coloniaux étaient fréquents en raison de la ténacité du sentiment anti-Français des peuples colonisés, et ils étaient aussi sanglants à cause des répressions inhumaines dont le soutien s'est trouvé sur l'esprit d'empire des Français, surtout celle des milieux conservateurs.

C'est paradoxal que l'éruption du sentiment anti-Français et l'inhumanité des répressions ont la vertu de démolir le noyau de l'esprit d'empire : «mission civilisatrice», de là vient qu'au lendemain de la Libération, les émeutes en Syrie et la révolution d'août au Viet-nam ont offert aux Français la possibilité pour une autre libération, libération de l'esprit d'empire ; en fait, libération manquée.

Les Français ne se sont pas aperçus du crime de colonisation malgré l'éruption du sentiment anti-Français des Syriens et des Vietnamiens et aussi bien que malgré les répressions sanglantes. Ce sont les paroles des journaux conservateurs et de de Gaulle qui sont pour beaucoup dans cette inconscience.